Opinion オピニオン

■解答乱麻■

子供たちの夢を応援する責任

参院議員 山谷えり子

〈やまたに・えりこ〉サンケイリビング新聞編集長、首相補佐官（教育再生担当）など歴任。1男2女の母。

長い夏休みは、子供たちが夢や志を育む季節でもある。私も小学生時代は新聞記者になりたいと「子供新聞」づくりに励み、中学生になると、今度は水泳のオリンピック選手を夢みて、まっ黒に日焼けして泳ぎこんでいた。

イチローの小学6年生の時の作文には「僕の夢は一流のプロ野球選手になることです。そのためには中学・高校と全国大会に出て活躍しなければなりません」という一文があり、練習量や打率、入団したい球団の名前、契約金まで記しながら「一流の選手になったらお世話になった人に招待券を配って応援してもらうのも夢の一つです」と締めくくっている。

サッカーのイタリア1部リーグ・セリエAで活躍する本田圭佑選手も、小学6年生の時の作文で「大人になったら世界一のサッカー選手になりたいと言うよりなる。世界一になるには世界一練習しないとダメだ」とあり、セリエAで背番号10番をつけること、年俸、契約先などが書かれ、ワールドカップの決勝戦で兄と力をあわせ得点を入れ、ブラジルを破ることが夢だと記している。

志をもって努力し、世界のトップになれる人間はひと握りにすぎないが、子供たちの夢を応援することは大人の楽しい責任のひとつであろう。その際、ただ「いいわねぇ」と言うだけでなく、その志に具体性をもたせるべく戦略性を授け、粘り強く継続することの崇高さを伝えられたなら、子供たちは主体的な人生を歩む入り口に立つことにもなろう。

私の父も「子供新聞」を作る私に取材のイロハをアドバイスし、「将来ホワイトハウスで大統領に取材したら面白いなあ」などと夢をふくらませてくれた。オリンピック選手になれそうにないと挫折感にひたっている時には、「水泳の先生ならいけるんじゃないか」などと言ってくれたものだった。

翻って、私自身、我が子にこうしたことが十分にできたかを省みれば忸怩（じくじ）たる思いもあるが、それでも世の中は良くしたもので、先生や周囲の方々が補ってくれるのが〝人の世〟でもあろう。

若い頃、米アリゾナでホームステイしていたことがあった。小学校の卒業パーティーに招かれたので行ってみると、保護者に交じって、近所の人やスポーツ、教会関係者なども集合する中で、子供たちが1人ずつ思い出の品を手にミニスピーチを始めた。

小石を持った子は「初ホームランの時の球場の小石です。野球選手になりたい」と言い、ベトナム移民の少女は、まな板を手に「おいしいベトナムレストランを開きたい」とほほ笑み、リボンを手にした子は「ママのようなレディーになりたい」と言い、本を手にした子は「図書室の本を読みきりました。作家になりたい」などと語ったのである。スピーチのたびに会場は応援の声で盛り上がり、さすがアメリカンドリーム、スピーチの国、と感心もした。

この夏休みにも、カリフォルニア州から高校生たちが国会見学にこられたので、将来何になりたいかを尋ねると、「生物学者」「機械工学技術者」「医師」「女優」「教師」「日米のかけ橋に」などの答えが返ってきた。

「すべての夢は叶（かな）う。それを追い続ける勇気があるのなら」とは、若かりし頃手帳に書きとめて読み返していたウォルト・ディズニーの言葉である。